

Part 2 企業向け提案の変化

コンサルカ・プレゼン力鍛え 3ステップでVoIP提案を進める

「IP電話サービスの本命は法人市場」——業界内にはこうした声が少ないからである。IPならではの付加価値化を訴求しやすいうえ、収益面でのプラスも期待できるからだ。

そうした事業者側の展開は、企業ネットワーク構築をビジネスの主軸とする通信機器ディーラー/SIにもインパクトをもたらす。パート2では、VoIP・IP電話の本格化による通信ビジネスの変化と通信機器ディーラー/SIの対応策について、通信コンサルタントの藤島信一郎氏に解説していただく。

IP電話サービス普及の要因

いよいよIP時代の到来である。昨年よく使われた言葉のベスト5に「IP電話」が入っているという。筆者

は、今年2003年を「IP電話元年」と位置付けている。その理由としては、qキャリアが続々とサービスを開始w「050」の利用が9月頃から可能e IP電話相互は通話無料の3つがあげられる。

qは、図2に示したように、先行するYahoo! BBの「BBフォン」を追いかけて各キャリアが今春続々とIP電話サービスを開始していることである。そして、IP電話の加入数は、もうすぐ500～600万と予想されている。これは固定電話約5000万の10%程度となるのである。

wは、「050」で始まる11桁の番号が、今年の9月頃から「固定電話からIP電話へ発信できる番号」として使われるようになるということで、これによってIP電話の普及は大きく加速

していくものと思われる。

eは、ホームユースのIP電話加入者相互の通話は無料(ゆくゆくはキャリアの異なるIP電話加入者相互も無料となる見込み)なので、大きなフォローの風を吹かせることとなる。

通信ビジネスの変化

今年はIP電話元年であると同時に、大きな転換期となる年でもある。そのポイントは図3のように整理できるが、それを別の切り口から見ると、情報通信業界の分野で図4のような「戦争」が勃発しているといっている。

図1 今年がIP元年



図2 IP電話サービスの動向

事業者名	2002.4	2003.4	2004.4	2005.4
地域電話会社				2003年 IP電話元年
長距離・KDDI	02/11	法人向けIP電話サービス提供	03/3から個人向けサービス開始	
NTTコム		03/3	OCN.Phone開始(02/11から法人向けシェアードIP-PBX試験サービス、03/4から本サービス)	
フュージョン		03/4	FUSION IP-Phone開始	
パワードコム		03/3	POINT Phone試験サービス開始(03/5から本サービス)	
日本テレコム		03/3	ODN IPフォン開始	
プロバイダー				
ソフトバンクBB			BBフォン提供中	
NTT-ME			XePhion コールPro(*1)、Xephionコール(*2)など提供中	*1: ブロードバンド利用 *2: 中継IP網
NEC		03/3	フュージョン/NTTコム/ぶらら各社対応のIP電話サービス開始	
SCN		03/3	So-netフォン開始	
ニフティ		03/3	@niftyフォン開始	
松下電器産業		03/3	hi-hoでんわ-C開始	
CATVなど				
ZTV			Z-Phone(現在は加入者同士の通話だけ)	
ジュピターテレコム			2002/11にIP電話の実験開始	
メディア			Mライン: FTTHなどを利用した直加入型。03などの番号で発信を実現(注)	

(注): IP電話で「加入電話網相当の通話品質」を実現したため、2001年7月に「03」などの電話番号を取得済み。

出典: 新聞情報 & 日経コミュニケーション2003.1.6

IPという総枠の中で、いろいろな面で戦争が起こっているのであるが、少し補足してみよう。

の固定電話と携帯電話の戦争の話はもう旧聞になるくらいで「勝負あった」ともいえるが、そこへIP電話が「俺が主役だ」と殴り込んできたわけである。

その普及のピッチは、前述のように、今春から今夏にかけて、固定電話の10%強がシフトしそうであるし、NTTが昨年4月に公にした中期計画(グループ3カ年計画)で、「電話交換機の投資凍結」とともに「5年以内に市外網を、10年以内に市内網を含む全ネットワークをIP化する」と宣言したから、遅くとも今後10年以内には、わが国のネットワークはIPに完全な血液交換をすることになる(筆者自身は、もっと早いペースになると見ている)。

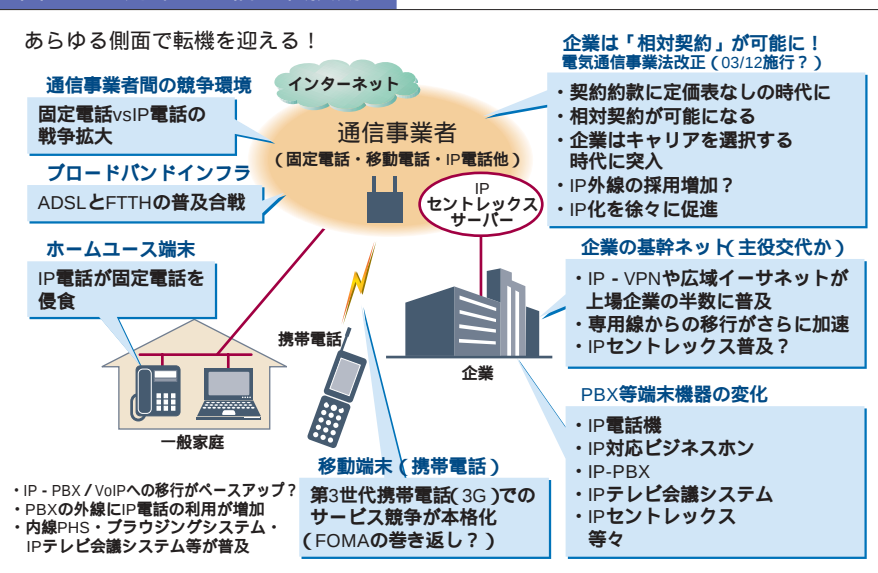
VoIPネットワークを構築する際、IP網に何を選択するか、IPセントレックスの網に何を選択するかとなった時、今は東西の横綱がいる。の「広域イーサネット」と「IP-VPN」の戦争である。関脇クラスの「HSD(高速デジタル)」「FR(フレームリレー)」等もあるが影が薄くなってきた。幕下もいるがさらに影が薄く、この横綱は「この数年で上場企業の約半数が利用するだろう」といわれている。

それは、の専用線とブロードバンドの戦争に飛び火したともいえる。いまや「専用線よさようなら、ブロード

SDSL

Symmetric Digital Subscriber Line: ADSLが上りと下りの速度が非対称(Asymmetric)であるのに対し、双方向で対称なデータ伝送速度が可能な技術。伝送速度は最大2Mbps。ISDNとの干渉を抑える日本仕様(AnnexH)があり、SSDSLとも呼ばれる

図3 IP元年は通信の転換期



バンドよこんにちは」の傾向が生まれてきた。2001年11月から2002年10月の1年間に、ADSL・SDSL・FTTHに移行したユーザーのうち4割以上が、従来は「エコノミー専用線」や「高速デジタル専用線(HSD)」のユーザーだったというデータもある。

の「ADSL」と「FTTH」の戦争も激しくなっている。ADSLの猛烈な普及は、FTTHの普及にブレーキをかけてはいるが、早晚逆転するという予測が随所で行われている。スピードや安定感(信頼度)では、FTTHに軍配が上がる。コンテンツや料金、サービス利用可能地域等の問題から、まだ主役になり切っていないが、2005年～2008年頃には逆転し、FTTHが首位の座を奪うものというのが大方の予想である。

の「BBフォン」と他のIPキャリアの戦争も激しさを増している。IP

図4 IP時代の情報通信分野での戦争

固定電話	vs	携帯電話/IP電話
ATM	vs	IP
広域イーサ	vs	IP-VPN
専用線	vs	ブロードバンド
ADSL	vs	FTTH
Yahoo! BB	vs	他のIPキャリア
H.323	vs	SIP(シップ)
NTT	vs	他のキャリア
従来電話機	vs	ソフトフォン
従来型携帯	vs	IMT-2000
NEC+OKI	vs	シスコ&アバイア

あちこちで「戦争」が勃発している。この収斂方向を見極める必要がある。

電話事業者の相関関係や戦争状態を図5に示した。この戦争のポイントは加入者の争奪と、相互接続をどうしていくかの2点であろう。

IP電話の普及のためには、相互接続は必須ではあるが、その前に加入者の確保を行うべくADSLモデムの無料配布など戦国時代の感がある。ADSLユーザーの70%は「IP電話」に加入するというデータも報告され

骨格見えた

特集① IP電話ビジネス